

## 論 説

# アメリカにおける「ブラック・ナショナリズム」の源

原 百 年

### はじめに

ナショナリズム研究の分野において、アメリカはしばしば研究の対象とされてきた。ただし、その多くはアメリカの独立や建国に関わる研究であった。近代的な「ネーション」という概念が、「主権的ピープル」(sovereign people)という概念と強い関係があるため、「ピープル」の名においてイギリスから独立したアメリカ独立革命がその典型的一例として考えられたからである。ところが、「ネーション」または「主権的ピープル」という概念が全面に押し出されていたものの、独立前はもちろん、独立後においても、アメリカ合衆国に住む人々は、「ひとつのネーション」といえるような状態になかった。独立直後は常に連邦崩壊の危機にさらされていたし、一時的ではあったが、南北戦争のときには実際に「アメリカン・ネーション」は南北に分裂した。現在においても移民問題（主にラティーノ）や人種問題（主に黒人）を抱え、誰が「アメリカン・ネーション」に含まれるのかという合意はない。

そのようなアメリカで、黒人たちが早くから「ブラック・ナショナリズム」を展開していたという事実はあまり知られていない。唯一の例外は、1992年に映画化され、デンゼル・ワシントンが演じたマルコムXの存在で

あろう。マルコム X は、イライジャ・ムハンマド率いるネーション・オブ・イスラムのスポークスマンとして1950年代に頭角を現し、公然とブラック・ナショナリズムを唱えたことで知られている。マルコム X が影響を受けたとされるマーカス・ガーヴェイも「ブラック・ナショナリスト」と目されるが、マルコム X ほどは知られていない。

後ほど述べるが、アメリカ国内では1960年代から1970年代にかけて、公民権運動や「ブラック・パワー・ムーヴメント」の影響により、ブラック・ナショナリズム研究が一種のブームになった感がある。そして興味深いのは、多くの論者が「ブラック・ナショナリズム」が遅くとも18世紀終わり頃には存在したことを主張し、著作や論文が21世紀に入っても出版され続けていることである。本論文では、アメリカ国外ではあまり知られてこなかった「ブラック・ナショナリズム」に光を当て、それに関してどのような研究がなされてきたかを紹介したい。その上で、筆者なりの考えを述べ、「イデオロギー的アプローチ」が有効であることを論じたいと思う。

## 第1節 定義

### 1. ブラック・ネーションとは

最もシンプルな言い方をすれば、ネーションとはある特定の共同体を括る、ひとつの概念的共同体カテゴリーである<sup>1</sup>。したがってアメリカにおける「ブラック・ネーション」というのは、「ブラック」すなわちアメリカの「黒人」という特定の共同体を括る、ひとつの概念的共同体カテゴリーである<sup>2</sup>。ここで注意したいのは、この「ブラック・ネーション」という共同体カテゴリー及びそれに関わる全ての言葉は、その存在を「自明のこと」として扱っているが、実は事実によって規定されているわけではな

いということである。言ってみれば、「ブラック・ネーション」という共同体カテゴリーは単なる言葉であって、実体ではないということを常に認識すべきである。B・アンダーソンの言葉を借りて言えば、ブラック・ネーションは実体ではなく、ただその現実性を感じることができるだけの、「想像の共同体」である（Anderson 1983）。

では、ネーションとはどのような共同体を括るカテゴリーか。J・ブルイリーによれば、ナショナリストは概して、主に以下のような特徴をもってネーションが存在すると主張する。まず、ネーションは明白で独自の特徴をもって存在すること（独自性）。次に、このネーションの利益と価値は他の全ての利益と価値より重要であるということ（有価性）。そして、ネーションはできるかぎり独立した状態であること（主権性）（Breuilly 1993 [1982] : 2)<sup>3</sup>。したがってナショナリストの目から見れば、ネーションとは、独自性、有価性、主権性を有する共同体としてイメージされる。独自性があるということは、その共同体が均質で、統合されていることを意味する。また、共同体に有価性があるということは、その共同体が尊厳をもって賞賛されるべき存在であることを意味する。また、共同体に主権性があるということは、その共同体には自決権および自治権があることを意味する。したがって、「ブラック・ネーション」というのは、「黒人」という独自性を有し、それによって均質に統合され、その黒人という独自性に尊厳ある価値を見出し、自治権および自決権を有する主権的共同体（主権的ピープル）としてイメージされる共同体カテゴリーである<sup>4</sup>。

ネーションは、主権性を有するという点で、他の共同体カテゴリーと本質的に異なる。主権性を有するとイメージされるがゆえに、ネーションという共同体カテゴリーは通常、国家という強大な組織と結合し、「ネーション・ステート」になるか、そうなることが望ましいと考えられるようになった。したがって「ブラック・ネーション」も、潜在的に独立した国家

か、何らかの「統治単位」(governance unit)と一致することが求められる。ここでいう「統治単位」という概念は、M・ヘクターが *Containing Nationalism* (2000) の中で言及したものを念頭に置いて、「そのメンバーに対し、大体における社会秩序、略奪からの保護、正義、福祉などの公共財を提供する義務を負う、領域的な単位」を指す (Hechter 2000 : 9)。ネーションの独自性と有価性は、その「語られ方」、そして「想像のされ方」によってその内容が変化するし、その中に含まれるべき、あるいは排除されるべき人間集団も流動的に変化する。したがって、「黒人」という概念の「語られ方」「想像のされ方」によって、その中に含まれるべき、あるいは排除されるべき人間集団が決まり、変化する。

## 2. ブラック・ナショナリズムとは

ナショナリズムとは、最も簡潔に言えば、上記のネーションという共同体カテゴリーを構築する言説編成である<sup>5</sup>。より具体的に言えば、ナショナリズムは、その本質ではアンビヴァラントな共同体カテゴリーを論争の場とし、ネーションの独自性、有価性、主権性を構築する、言説編成である。したがって、ブラック・ナショナリズムは、「黒人」という独自性、それに基づく尊厳ある価値、そして主権的共同体（主権的ピープル）としての黒人のイメージを構築する言説編成だということになる。そして、そのような言説編成には、ブラック・ネーションの独自性、有価性、主権性をイメージさせる非言語的なシンボル表記、習慣的行動、運動もその一部として含まれる。

では、そのようなブラック・ナショナリズムの言説編成には、より具体的にはどのような内容が含まれるのか。ブラック・ナショナリズム研究の古典 *Black Nationalism in America* (Bracey, Meier, Rudwick 1970) によれば、ブラック・ナショナリズムは以下のような側面に黒人の独自性と有

価値性を見出している。まず、「人種」という概念である。黒人ということの意味は、まずもって人種的に把握される (ibid.: xxvi)。ただし、ここで言う「人種」とは、「アフリカに起源をもつとされる人々の血を引く」というくらいの概念でしかなく、生物学的というよりは、文化的・社会的概念である。肌の色にしても、白人やインディアンとの混血により、色黒の白人よりも白い肌をもつ黒人もいるので、必ずしも肌の色が基準ではない。肌の色はともかく、アメリカにおいては、「一滴の血」でもアフリカ系の血が入っていれば黒人と見なされ、ニグロ、アングロ・アフリカン、ブラック・アメリカン、アフリカン・アメリカンなどと呼ばれてきた。黒人というカテゴリーに包含される、このような「黒人人種」(black race) という概念が、ブラック・ネーションの独自性を構築する主たる要素になっていて、その有価値性を主張する根拠にもなっている。

黒人が共有するとされる文化も、ブラック・ネーションの独自性と有価値性を構築する重要な要素である。(アフリカ大陸を含む) 黒人の栄光の歴史、黒人特有の芸術、文学、音楽、世界観、そしてアフリカ的・アラブ的な名前、アフリカ衣装、アフリカ言語などを生活に取り込むライフ・スタイルなど、さまざまな文化的要素がある (ibid.: xxvii)。また、18世紀末の時点で、いわゆる「黒人教会」(black church) は白人の教会から分離し、独自の宗教観や儀礼・習慣を育んできたし、同じように18世紀末から多く設立されるようになった「黒人学校」(black schools) や各種「アフリカ協会」(African Societies) でも黒人特有の文化や倫理観を育んできた。人種に加え、これらの宗教・教育・社会活動によって育まれた「黒人文化」(black culture) も、ブラック・ネーションの独自性を構築する主たる要素になっていて、その有価値性を主張する根拠になっている。

S・ホールによれば、こういった人種という概念や文化は、異なる人々を単一のアイデンティティにまとめ上げる一種の「言説装置」(a discur-

sive device) である。それはネーションの意味を構築し、同時にナショナル・アイデンティティを構築する言説装置である。そして、それらの人種という概念や文化についてナショナリストが語るとき、ある特徴的な「語られ方」があるといい、ホールはそれを「言説戦略」(discursive strategies) と呼ぶ (Hall 1992 : 296-297)。最初に注目すべき言説戦略は、歴史、文学、メディアの中で繰り返し語られる「ネーションのナラティヴ」である。その内容は、ネーションに関する物語、イメージ、風景、歴史的栄光や苦難、シンボル、儀礼、将来的展望などが含まれる (ibid. : 294)。したがって、ブラック・ナショナリズムは、黒人に関する物語、イメージ、黒人が生活する風景、黒人の歴史的栄光や苦難、黒人のシンボル、儀礼、将来的展望に関するナラティヴとして表現される。人々はそれらのナラティヴを通じてブラック・ネーションを想像し、それと自己同一化することによってブラック・ネーションのナショナル・アイデンティティを構成する。

次にホールが言及する言説戦略は、ネーションの原初主義的描出である。原初主義は、ネーションを「自然」で「太古から存在する」永続的な共同体として見なす。また、ナショナリティを「自然に身についている意識」だと考える。「自然に」ということは、それが「所与」だということを意味し、ネーションのメンバーを結びつけているのは、いわゆる「原初的絆」で、「血とか言語とか習慣とかいったものを同じくするということはそれだけで、口では言い表せない、時には圧倒的な強制力をもっていると考えられている」(Geertz [1973] 1993 : 259=1987 : 118)。ブラック・ネーションの場合、特に「黒人人種」が「原初的指標」として機能し、人々はしばしばそれに言及するナラティヴを通じ、ブラック・ネーションを原初的共同体として描出する。ゆえに、その原初的絆は太古の昔に遡り、アフリカ大陸の黒人をも含む、汎アフリカニズムとしての表現されることも

ある。この汎アフリカニズムの概念は、必ずしも領土的にとらえられるものではなく、「黒人人種」の一体性を表すものである (Moses 1978 : 17-20)。

原初主義的描出に加え、ネーションの起源神話も、ひとつの言説戦略としてしばしば語られる (Hall 1992 : 294)。ブラック・ネーションの場合、しばしば古代エチオピアや古代エジプトに言及することで、その汎アフリカ的な起源神話を語ることになる。もちろんここでは、「伝統の創出」という行為が伴うことになる (Hobsbawm and Ranger 1992 [1983])。

このような言説戦略によってブラック・ネーションの独自性と有価性が構築され、一体感が醸成される一方、他方でその主権を求める運動、レトリック、プロパガンダも、言説戦略に含まれる。*Black Nationalism in America* によれば、ブラック・ネーションが主権を求める方法は、大きく分けて4つほどある (Bracey, Meier, Rudwick 1970 : xxviii-xxix)。最も穏健な種類として、ブルジョアの改革主義 (bourgeois reformism) がある。この立場は、黒人政治家を擁立する、黒人政党を結成する、黒人が多く住む地域の政治や行政に黒人自身が管理・運営に携わるなど、アメリカの民主主義体制の中で主権を行使するよう努める。これをブラック・ナショナリズムと呼ぶか議論の余地があるが、これがひとつめである。ふたつ目は、アメリカの既存の政治・経済制度を転覆させ、差別や搾取されている黒人をその状態から解放し、自決権を獲得することを目指す、革命的ブラック・ナショナリズム (revolutionary black nationalism) である。三つ目が、「故郷のアフリカ」へ帰還し、アメリカでは不可能な「黒人による自治」をそこで実現することを目指すエミグレーションニズム (emigrationism) である。移住先はアフリカが主だが、実際は、東インド諸島、南アメリカ、メキシコ、カナダも含まれた。最後に、アメリカ国内に黒人だけによって統治される自治体もしくは国家を設立しようとする領土的分

離主義 (territorial separatism) である。これは特に、かつて黒人人口が多かった南部で計画された。ブラック・ネーションの主権を求めるこれらの運動、語り、レトリック、プロパガンダは、ブラック・ナショナリズムの言説戦略に含まれよう。ブラック・ナショナリズムは、必ずしも国家の設立を求めるものではないが、ある特定の境界内において、黒人による自決 (self-determination) や自治 (self-governance) を可能にする「統治単位」 (governance unit) をもとめるものである。

## 第2節 ブラック・ナショナリズム研究における論争点

ブラック・ナショナリズムの研究は、1960年代から1970年代にかけてブームを迎えた。それは当然のことながら、1960年代の公民権運動とその後の「ブラック・パワー」の影響を受けている。代表的な著作としては、E・ウドムの *Black Nationalism: A Search for an Identity in America* (1962)、T・ドレイパーの *The Rediscovery of Black Nationalism* (1970)、J・ブレイシー、A・メイヤー、E・ラドウィックの *Black Nationalism in America* (1972)、R・カーライルの *The Roots of Black Nationalism* (1975)、A・ピンクニーの *Red, Black, Green* (1976)、W・モーゼスの *The Golden Age of Black Nationalism, 1850-1925* (1978) などが挙げられる。近年の著作としては、D・ロビンソンの *Black Nationalism in American Politics and Thought* (2001) や J・テイラーの *Black Nationalism in the United States* (2011) が挙げられよう。以下では、これらの著作の議論を参照しつつ、そこから浮かび上がる論争点を示したいと思う。

### 1. J・ブレイシー、A・メイヤー、E・ラドウィック

1960年代から1970年代にかけてのブラック・ナショナリズム研究の論点



を知るうえで特に役立つのが、すでに紹介したブレイシー、メイヤー、ラドウィックの *Black Nationalism in America* (1972) である。彼らの著書はアメリカの歴史上「著名なブラック・ナショナリスト」と目される人物の著作やスピーチを編集したものであったが、彼らはその中で3つの問いを設定した。1つは、ブラック・ネーションとブラック・ナショナリズムをどのように捉えるかに関する問いである。これは主としてブラック・ナショナリズムの由来にかかわる問いなので、決定的に重要である。2つめは、期間に関する問題である。ブラック・ナショナリズムが初めて生じたのはいつか。継続的に生じ続けているのか。ピークは（もしあるとすれば）いつか。「満ち干」(ebb and flow) があると考えられるか。要するに、期間や盛衰のタイミングの問題である。そして3つめが、ブラック・ナショナリズムがどの階級と結びつきながら現れるかという問いである。この問いは、当時マルクス主義的アプローチをとった論者が特に関心を示していた<sup>6</sup>。彼らは、資本主義の結果生じる「国内植民地」においては、下層階級の者が搾取される立場にあり、黒人がまさにそのような人々であると考えた。後者二つ問いは、一つ目の問い、すなわちブラック・ネーションとブラック・ナショナリズムをどのように捉えるかという問いに対する答えによってその答えが変わってくるという意味で、一つ目の問いと連動している。1970年に示されたこれらの論点は現在でも有効であり、異なる論者が異なる見方を示している。

ブレイシーは自身が黒人で、CORE (Congress of Racial Equality) シカゴ支部の議長を務めるほどの「筋金入り」の黒人活動家でもある。ブレイシーは、当時影響力を強めていたマルクス主義的解釈の一翼を担い、「国内植民地」の理論をもってブラック・ナショナリズムを説明しようとした。ブレイシーによれば、「ブラック・アメリカはホワイト・アメリカに従属させられている植民地の状態として存在」しているので、「ブラック・ア

メリカはひとつの植民地である」(Bracey, Meier, Rudwick 1972 : Ivi)。ブラック・ネーションは、歴史上常にホワイト・アメリカによって政治的・経済的・文化的に搾取され続け、ネーションとして発展できない状況にある。ブレイシーにとって「ブラック・アメリカ」はひとつの現実的なネーションであり、「国内植民地」のそれとして理解される。

さらに、ブレイシーにとって「国内植民地」としてのブラック・ネーションの経験は、アメリカ特有のものではない。それは、世界的な資本主義の広がりの中で生じた、なかば普遍的で必然的な現象である。「ブラック・ナショナリズムは、一般的には非西洋諸国の人々によるナショナリズムの一種であり、より具体的にはアフリカと西インド諸国の黒人によるナショナリズムの一種である」(ibid. : Ivi)。ここでいう「非西洋諸国の人々」とは、アジア・アフリカ・南北アメリカすべてを含む「被植民地化された地域の人々」を指すのであり、当然日本人のようなケースは含まれない。ブラック・ナショナリズムは、被植民地化された地域の人々のナショナリズムと同じで、資本主義がもたらす普遍的現象の一部として捉えられる。ブレイシーにとって、他の被植民地のナショナリズム同様、ブラック・ナショナリズムの説明変数は「資本主義に由来する搾取や抑圧」である。

したがって、説明変数である「資本主義に由来する搾取や抑圧」が存在した時点でブラック・ナショナリズムの種は蒔かれ、「国内植民地」の状態にある以上、ブラック・ナショナリズムは継続する。「ブラック・ナショナリズムの継続性」を主張するブレイシーは、「ブラック・ナショナリズムは紆余曲折を経ながらゆっくりとした発展を遂げたが、遅くとも1787年から現在に至るまで、絶え間なく、しかも激しく勢いを増してきた」と断言する (ibid : Ivii)。この考えが述べられたのが「ブラック・パワー」の全盛期だったことを考えると、「激しく勢いを増してきた」という見方

には、当時としてはある一定の説得力があったであろう。今となっては、「ブラック・パワー」は過去の産物として見られがちだが、近年においてもブラック・ナショナリズムをマルクス主義的に解釈する論者は存在するので、その論点自体はまだ生きている<sup>7</sup>。

ブレイシーにとって、ブラック・ナショナリズムは主として下層階級の運動である。「ブラック・ナショナリズムは、上層階級やインテリ層よりも下層階級の黒人の意識と組織により強く持続的に見られる」(ibid : Ivii)。従って、アンテバラム期にみられるエリート（自由黒人）のエミグレーション計画（主としてアフリカへ）は「限定的」(limited)なブラック・ナショナリズムである。むしろ、F・フレイザーが明らかにした下層階級に属する奴隷黒人の「見えざる教会」(invisible church)にアンテバラム期のブラック・ナショナリズムを見出している (ibid : Ivii-Iviii)<sup>8</sup>。したがって、上層階級に属する自由黒人のマーティン・デイレイニやアレクサンダー・クラメルらの「ブラック・ナショナリズムの父」たちは、本格的なブラック・ナショナリストとしてみなされないことになる。ブレイシーによれば、マークス・ガーヴェイやデュ・ボイスらを含むその後の黒人リーダーたちもやはり下層階級の心を掴むことはできなかった。1960年代に入り、下層階級の黒人が推し進めた一連の反乱に、もともと統合主義的志向をもつ中間層の黒人が自らの利益を増加させるために便乗してきた。そして、「黒人人口のすべての階層で広く支持されるナショナリストのリーダーとナショナリストのイデオロギーを伴いながら、アメリカの歴史上はじめて本格的 (full-blown) なブラック・ナショナリストの運動が生じた」という (ibid : Iix)。ブレイシーにとって、1960年代に始まる「本格的なブラック・ナショナリズム」は、単に1960年代特有のコンテクストによって生じた現象ではなく、「資本主義に由来する搾取や抑圧」の長い歴史的発展の中から生じた、主として下層階級の黒人によって進められた運

動である。

一方、メイヤーとラドウィック（二人とも白人である）はブレイシーと異なる立場をとる。メイヤーとラドウィックによれば、「アメリカのブラック・ナショナリズムは近代的ネーション・ステートのエスニック・マイノリティに特徴づけられる、ナショナリスト的傾向の一例として考えられなければならない」(ibid : Iiii)。確かに、黒人は他のエスニック・マイノリティと比べて厳しい差別の対象となってきた。その意味では特別である。しかし、メイヤーとラドウィックからすれば、ヨーロッパ、南米、アジアからアメリカに移民してきた集団と比べて、顕著な類似点がある。それは、エスニック・アイデンティティの二重性(dualism)であり、アジア・アフリカの植民地の人々のアイデンティティとは明らかに異なる。状況的に一番近いのはユダヤ系アメリカ人で、思想的にも同化主義、文化多元主義、エミグレーションイズム(ユダヤ人の場合はシオニズム)によって表現される点で共通する(ibid : Iiii)。黒人のアイデンティティは、ブレイシーが考えるほど統合されたものではなく、両面性をもつものとしてみなされる。

メイヤーとラドウィックにとって黒人は、「アメリカ人」に同化する希望をもち、そうなる運命にあるエスニック・マイノリティである。他のエスニック・マイノリティ同様、大抵の黒人は、エスニック・アイデンティティを保持したいと願う一方、他方で「本物のアメリカ人」になりたいと願ってきた。ブラック・パワーにみられるような黒人意識にしても、平等な立場でアメリカ社会に統合されていく上で必要不可欠なものとみなされているのであって、アメリカ社会から完全に分離・独立する希望をもっている者はごく少数である。「アメリカの歴史を通じて、そして今日に至っても(最近の意識調査が示しているように)、黒人のイデオロギーにおける主要な希望はより広いアメリカ社会への統合であり続けている」(ibid : Iiv)<sup>9</sup>。この点からいって、黒人の立場は他のエスニック・マイノリティ

と同じである。メイヤーとラドウィックにとって、1960年代から1970年代の分離主義的激昂はいわば「病的」<sup>1</sup>といわないまでも、「異端」である。

ブラック・ナショナリズムのイデオロギーがどの階級によって奉じられたかということに関しても、メイヤーとラドウィックはブレイシーと意見を異にする。1960年代以降のブラック・ナショナリズムが下層階級の黒人によって奉じられる傾向にあったことを認めながらも、歴史上それを一般化することはできないという。なぜなら、アンテベラム期のエミグレーション運動は主として黒人エリートの運動であったし、1960年代以降の分離主義にしても中間階級から上層階級に属するエリートが含まれていたからである (ibid : Iiv)。ブレイシーが言うような、「ブラック・ナショナリズムの担い手は下層階級である」とする見方は、歴史的にみても無理があるし、そんなに単純ではないというのがメイヤーとラドウィックの見解である。

ブラック・ナショナリズムが生じた期間に関し、メイヤーとラドウィックは「満ち干」(ebb and flow) がある<sup>2</sup>と考える。ブレイシーが植民地主義の発展と共にブラック・ナショナリズムが「リニア的」に強くなってきたと考えたことは既に述べたとおりで、その考えと根本的に対立する。極論を言えば、「偶発的」(contingent) に「満ち干」するということである。黒人の思想に関して明らかなのは、その流動的で無形的な性質である。対立する見解を受け入れる姿勢が常にあり、圧力や機会に応じて、その方向性を変える。だから時には暴力的な反アメリカン、反西洋、反白人、ガーヴェイズム的なブラック・ショーヴィニズムで盛り上がることもあれば、何かしらの刺激が与えられれば自らが属する西洋文明のため、民主主義のため、母国アメリカのために命を懸けて戦う (ibid : Iv)。これはまさに、黒人のアイデンティティに二重性があるからである。メイヤーとラドウィックは、黒人の心の中に常に (ブラック) ナショナリスティックな思想が

潜んでいることを認めながらも、ナショナリズムの感情の満ち干、特定の種類のナショナリズム・イデオロギー（例えば文化・経済・宗教など）は、黒人全体、または異なる階級、地域の黒人が置かれたそのときどきの状況によって左右されるという<sup>10</sup>。

## 2. A・ピンクニー

ブレイシー、メイヤー、ラドウィックは、このように *Black Nationalism in America* (1970) の中で、ブラック・ナショナリズムに関する（１）その捉え方（由来）、（２）期間と盛衰、（３）「ブラック・ナショナリズムの主たる担い手」に関して意見を戦わせた。そしてその後のブラック・ナショナリズムの主要な研究者も、少なくとも部分的にこの論争に加わっていった。例えばピンクニーは、*Red, Black, and Green: Black Nationalism in the United States* (1976) の中で「国内植民地論」を展開し、ブレイシーの側についた<sup>11</sup>。ピンクニーによれば、「黒人は常に、海外のヨーロッパ植民地主義の犠牲者と同じように、植民地化された地域の人々として扱われ、出生によって決まるインドの不可触民階級のような階級システムの中に貶められてきた。ブラック・ナショナリストのイデオロギーが発生し、世代を超えて持続しているのは、まさにこの植民地主義とカーstens的地位があるからである」(Pinkney 1976: 8)。アメリカの国内植民地主義はヨーロッパの植民地主義と異なる点があるとしながらも、その本質は同じだという。ピンクニーは共通する性質として、以下の点を挙げる。まず、そのシステムが武力と暴力による強制をとめない、不随意 (involuntary) に人々を隷属的地位に貶める点である。次に、植民者側の権力が、被植民者側の文化を抑圧し、変換させ、破壊するような政策をシステムチックに行う点である。そして、被植民者は植民者の代表によって一方的に管理され、植民者の優位を継続させる手段として差別的人種主義が採用さ

れる点が挙げられる。そして最後に、植民者はそのような体制から経済的利益を受けるという点である (ibid : 9)。恐らく、ヨーロッパ列強の植民地とアメリカの「国内植民地」との最大の違いは、前者が領土的に把握することが可能であるのに対し、後者に関してはそれが難しいということであろう。確かに19世紀末まではアメリカ南部に黒人の多くが集中して住んでいたという事実があったが、北部への継続的な「大移動」後はそうではない。そのことを考えれば、アメリカの「国内植民地」は、古典的な植民地の形態とは異なる。だが、「被植民者と植民者」という関係で見るとすれば、黒人と白人の関係は、アジア・アフリカにおける植民地の人々とヨーロッパ人の関係と比較できる。

ピンクニーによれば、ブラック・ナショナリズムのイデオロギーが見られる最初の例は、サウス・カロライナで1526年に起きた黒人の暴動、ヴァージニア植民地で1663年に起きた暴動、ニューヨークで1741年に起きた暴動である (ibid : 16)。それらの暴動が「ブラック・ナショナリズム」と言えるかどうか議論の余地があるが、ピンクニーとしては、黒人たちが「結束」(unity) と「自決」(self-determination) を求めていた点で、ブラック・ナショナリズムのイデオロギーを見ることができるとしている。ポール・カフィーやヘンリー・マクニール・ターナー、マーカス・ガーヴェイなどの人物を挙げ、エミグレーションという形で表現された19世紀から20世紀初頭にかけてのブラック・ナショナリズムを紹介しつつ、ブラック・ナショナリズムが最も勢いづいたのは1960年代だとピンクニーは述べる。そして1960年代にブラック・ナショナリズムが勢いづいたのは、多くの黒人が「ブラック・ネーション」が国内植民地の状態にあることを認識し、それから自由になろうとしたからである (ibid : 12)。そして「ブラック・ナショナリズムは数世紀に渡って続いてきたが、現在のような規模で現れることはなかった」し、1970年代以降も「静まるというよりは、大

きくなり続けるであろう」と予測した (ibid : 15)。ブラック・ナショナリズムと国内植民地主義の関係だけでなく、それがガリニア的に強くなっていくだろうと予測した点でも、ブレイシーと共通した認識をもっていた。これはピンクニーとブレイシーがともに、「資本主義経済システムが変わらない限り、ブラック・ナショナリズムの説明変数である帝国主義や植民地主義が今後も続くであろう」とマルクス主義的観点から予測したからである。

### 3. W・モーゼス

モーゼスは *The Golden Age of Black Nationalism, 1850-1925* (1978) の中で、ブレイシーやピンクニーの立場を否定する。モーゼスが序文でわざわざ「ブラック・ナショナリズムは左翼の運動だとする見方に異議を唱える」と述べているところから、彼がマルクス主義論者を主たる論敵としていたことは明らかである (Moses 1978 : 11)。当該著作は、ブラック・ナショナリストの思考の中に見られる同化主義 (assimilationism) または文化適応主義 (acculturationism) に焦点を当てることを主目的としている (ibid : 10)。すなわち、モーゼスはブラック・ナショナリストにアイデンティティの二重性を認め、彼らがいかにアメリカ社会に溶け込もうと希望していたかに焦点を当てるのである。いわば、アイデンティティの二重性という側面と、アメリカ社会への統合の過程で生じるジレンマに焦点を当てるという意味で、モーゼスもメイヤーとラドウィックのように黒人をアメリカのエスニック・マイノリティとして捉えているといえよう。

ただし、モーゼスにとって、黒人は他のエスニック・マイノリティと較べて特殊な存在でもある。ゆえに、ブラック・ナショナリストは一方で同化主義または文化適応主義に惹かれながらも、他方で分離主義を掲げるのである。言ってみれば、モーゼスはアメリカの「ブラック・ネーション」



を他の地域の植民地のネーションとも、アメリカ国内の他のエスニック・マイノリティとも同等に扱わない。他のエスニック・マイノリティと決定的に違うのは、もちろん、黒人が奴隷としてアメリカに連れてこられた点である。他のエスニック・マイノリティ——19世紀から20世紀にかけての黄禍論（yellow peril）で迫害された中国人や日本人でさえも——は基本的にはボランティアな移民であった。もちろん、ヨーロッパからの移民に関してもボランティアであった。奴隷という「商品」として強制的に連行された黒人は、その点で決定的に他のエスニック・マイノリティと異なる。「ブラック・ナショナリズムは、奴隷貿易によって新世界に移住させられたアフリカ人による、自決へ向けた衝動の一表現である」とモーゼスは言う（Moses 1996：6）。ブラック・ナショナリズムは、ヨーロッパやアジアのナショナリズムとは異なる、独自の原因（奴隷貿易によって新世界に移住させられたという歴史的事実）があるということである。

奴隷貿易によって新世界に移住させられたという独自な歴史的事実にブラック・ナショナリズムの由来を求めるモーゼスにとって、ブラック・ナショナリズムは他の植民地のナショナリズムと同じではない。資本主義システムと植民地主義が由来ではなく、奴隷貿易によって確立された黒人のセグリゲーションや差別が、自決を求める言説編成、すなわちナショナリズムを生じさせたのである。「ブラック・ナショナリズムは、奴隷経験の副産物として見ることができる。他の多くのナショナリズム同様、ブラック・ナショナリズムは、かつてばらばらだった集団が共通する迫害と屈辱を受けた結果の、それに対する反動である」（Moses 1978：16）。興味深いことに、モーゼスは（南北）アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの芽生えを1600年代におけるブラジルのパルマーズ（Palmares）や、ジャマイカやスリナムのマルーン（Maroon）に見出す。パルマーズはアフリカからブラジルに連れてこられた奴隷たちで、逃亡し、クイロンボ

(Quilombo) に独立した共同体を築いたとされ、同じく奴隷としてアメリカに連れてこられたマルーンは、北アメリカに共同体を築いたとされる (Moses 1996 : 6)。このように17世紀の南北アメリカに独立共同体を築いた黒人奴隷たちにブラック・ナショナリズムの芽生えを見て取るモーゼスは、奴隷貿易とブラック・ナショナリズムの間に強い因果関係を見出す。ブレイシーやピンクニーが考えるように、「国内植民地」の状況に対する反動がブラック・ナショナリズムの源だとは考えない。

北アメリカにおけるブラック・ナショナリズムは「アメリカ独立革命に先立つ」とモーゼスは断言する (Moses 1996 : 7)。よって、モーゼスにとってブラック・ナショナリズムは「北アメリカやヨーロッパのナショナリズムを真似たものではない」 (Moses 1996 : 6)。あくまでもブラック・ナショナリズムは、奴隷として連れてこられた黒人たちが迫害と屈辱から解放されるために起こした運動であった。モーゼスはE・ケドゥーリの名を挙げ、「ナショナリズムはその起源においてヨーロッパのイデオロギーであり、アメリカとフランスの革命がネーション・ステートというコンセプトを生み出し、ヨーロッパだけでなくアフリカやアジアの人々の政治思想を支配した」とする考えをわざわざ紹介した上で、アメリカのブラック・ナショナリズムに関しては、「大した影響を及ぼしていない」と「ヨーロッパ発祥のナショナリズムのイデオロギー的影響」を一蹴する (Moses 1997 : 10)<sup>12</sup>。モーゼスにとって、ブラック・ナショナリズムの源は奴隷制度にあり、ブラック・ナショナリズムがアメリカで現在まで存在しているのは、その制度に起源をもつセグリゲーションと黒人の低い地位があるからである (Moses 1997 : 35)。

「ブラック・ナショナリズムの担い手」の問題について、モーゼスはそれが中間・上層階級のブルジョア的運動だったと結論づける (Moses 1978 : 29)。それは、主として下層階級の闘争と考えるマルクス主義的解

釈を否定するものである。モーゼスが扱う「代表的なブラック・ナショナリスト」は、アンテベラム期においてはポール・カフィー、マーティン・ディレイニ、アレクサンダー・クラメルなどの有力自由黒人であり、再建期にはヘンリー・マクニール・ターナーなどの宗教指導者、20世紀には出版ビジネスで成功していたマークス・ガーヴェイなどであった。多くの場合白人社会の間で影響力をもって行動することができた彼らは、黒人の中で到底「下層階級」といえる社会的地位にあるわけではなかった。ただし、モーゼスは、マークス・ガーヴェイ以降のブラック・ナショナリズムが大衆を巻き込んだナショナリズムに発展していったという点については認める (ibid : 29)。

ブラック・ナショナリズムの時間的問題に関して言うと、モーゼスは他の論者と比較して特徴的な立場をとる。彼の著作、*The Golden Age of Black Nationalism: 1850-1925* というタイトルからわかるように、モーゼスはブラック・ナショナリズムの全盛期を19世紀後半から20世紀初めまでとみる。モーゼスは、ドレイパー、ピンクニー、カーライルらの論者を挙げ、彼らが1960年代からのブラック・ナショナリズムを「本物」とし、19世紀のブラック・ナショナリズムを「前兆」または「リハーサル」程度にしか見なしていないことに苦言を呈している (ibid : 5)。そもそも1960年代から1970年代にかけてブームになったブラック・ナショナリズム研究は、その時代に盛り上がった公民権運動やブラック・パワーに触発されたものであった。ゆえに、多くの研究がその時代に焦点を当てるのは自然の成り行ではあった。そのような中で、「アメリカにおける最も目覚ましいブラック・ナショナリズム運動は、1850年から1925年までの期間に生じた」と明言するモーゼスの主張は、極めて論争的であるといえる (ibid : 6)。モーゼスにとって、主要なブラック・ナショナリストはアレクサンダー・クラメル、マーティン・ディレイニ、ヘンリー・マクニール・ターナー、デ

ユ・ボイス、マーカス・ガーヴェイらの人物であり、マルコムXやブラック・パンサー党のリーダーたちではない。もっとも、モーゼスはブラック・ナショナリズムの源を奴隷制度に由来する迫害と差別に求めているので、北部でさえもジム・クローやリンチが横行していた1850年から1925年までにブラック・ナショナリズムのピークがおとずれたと考えたのは自然であった。国内植民地の階級闘争としてブラック・ナショナリズムを捉え、1960年代以降に「かつてないブラック・ナショナリズムの盛り上がり」を見たブレイシーやピンクニーとは、明らかに異なる視点でブラック・ナショナリズムを捉えている。モーゼスは、1995年10月16日の「百万人のワシントン行進」に見られるように、1990年代（恐らくは2015年現在も）においてもブラック・ナショナリズムのなごりが「分離主義」として現れ続けていると考える（Moses 1996 : ix）。それは、かつての奴隷制度に由来する黒人の従属的地位とセグリゲーションがいまだに存在するからに他ならない（ibid : 35）。

#### 4. D・ロビンソン

2000年代に入り、モーゼスに近い立場からブラック・ナショナリズムを分析した論者として、ロビンソンの名が挙げられる。「アメリカのブラック・ナショナリズムを第三世界の独立運動と比較し、その1つとして捉えようとする相当な努力が頻繁に行われているが、アメリカのブラック・ナショナリズムは国内の政治的・知的領域に適合した結果生じたものである」とロビンソンは主張する（Robinson 2001 : 6）。この主張は、直接的にそう述べていないが、モーゼスと同じように2つの見解を批判していると思われる。ひとつはブラック・ネーションを一種の植民地として捉えるマルクス主義的見解で、あとのひとつはケドゥーリが言及するような、「ヨーロッパ発祥のナショナリズムのイデオロギーが伝播した結果、世界

中にナショナリズムが広まった」とする見解である。モーゼスと同じように、ロビンソンにとってアメリカのブラック・ナショナリズムは、アメリカ独自の歴史——特に奴隷制度の歴史——に由来する。資本主義に由来する経済的・階級的格差や「西欧イデオロギーの力」ではなく、国内の特殊な政治的・社会的状況こそが、ブラック・ナショナリズムの由来というわけである。

黒人の政治や思考は、主流である白人社会の動向との関係の中で生まれてきたとロビンソンは考える。そしてその前提として、ラドウィックとメイヤー、そしてモーゼスと同じように、黒人をアメリカにおける1つのエスニック・マイノリティとして見る。「資本主義を転覆させようとした革命派グループを除けば、1960年代にブラック・ナショナリズムやブラック・パワーと呼ばれた運動は、他のエスニック集団がしてきた運動とよく似ていた。すなわちそれは、資本主義的な経済によって包摂された多元的政治システムの中で、それぞれの集団利益を追求する運動であった」

(ibid : 88)。特に1960年代と1970年代に関して言えば、そのような「エスニック・ポリティクス」を通じて、政府の政策に関して影響力を発揮し、経済的発展のための資源を獲得し、行政をある一定のレベルでコントロールすることが目的となった。簡単に言えば、ブラック・ナショナリズムは主として「エスニック多元主義」の形態をとったということである。ロビンソンはラドウィックとメイヤーの言葉を引き、「ブラック・ナショナリズムはブルジョア階級の改良主義であった」と述べている (ibid : 90 ; Bracey, Meier, Rudwick 1970 : xxvii)。ブラック・ナショナリズムを担ったのは、「エスニック・ポリティクス」を主導したブルジョア階級の黒人であり、構図的には他のエスニック・マイノリティの運動と重なる。

ロビンソンにとって、ブラック・ナショナリズムに本質的な「伝統」といえるようなものはない (Robinson 2001 : 6)。むしろそれは、その時代

の政治・文化・イデオロギーの状況に対応した、偶発的（contingent）な現象として捉えられている。この点でもラドウィックとメイヤーの見解と重なる。ブラック・ナショナリズムはその本質として、継続的または「繰り返される現象」ではなく、アド・ホックな時代の流れに応じた「満ち干」として捉えられる。この点を強調するために、ロビンソンはモーゼスを引く。モーゼスは、それぞれ異なる特有な歴史的コンテキストの中にナショナリストの思考を位置づけており、「白人世界の知的流行の変化にともないながらブラック・ナショナリズムもその形態を変化させてきた」ことを示した。モーゼスによれば、古典的ブラック・ナショナリズムは「キリスト教ヒューマニズムに基づいた奴隷制度廃止主義、西洋文明主義、エリート主義の思想である」。一方、第一次世界大戦以降のブラック・ナショナリズムには、「新しい傾向、すなわち、相対主義、多文化主義、プロレタリアン、世俗的な思想が見られた」（ibid：5；Moses 1978：7-10）。これらのモーゼスの言葉でロビンソンが強調したかったのは、第一次世界大戦以前とそれ以降のブラック・ナショナリズムに内容的な断絶があり、「ブラック・ナショナリズムに継続的・本質的な伝統と呼べるようなものはない」ということであつた。ガーヴェイ運動にしても、ガーヴェイ研究家で知られているR・ヒルの著作に言及し、それがいかに歴史的特殊性を有していたかを述べている（Robinson 2001：5；Hill 1983）。時代を横断して共通しているのは、「白人の人種主義的差別に対する反動であつた」という点である（Robinson 2001：6）。それぞれの時代的コンテキストがブラック・ナショナリズムの有り様に与えた影響を重視しながらも、迫害や差別が根本的原因と考える点で、ロビンソンとモーゼスは共通する見解をもつといえよう<sup>13</sup>。

## 5. T・ドレイパー

ブラック・ナショナリズムの根本的原因が奴隷制度に由来する迫害や差別であったとするモーゼスやロビンソンの主張は、直感的にかなりの説得力をもつものと思われる。誰しも、迫害や差別から解放されたいと思うのは当然のことと考えられるからである。また、資本主義に由来する経済格差や搾取がブラック・ナショナリズムの源だとしたブレイシーやピンクニーの議論にも一定の説得力がある。ところが、これらの説明を両方とも無効にしてしまう主張を早くからしていたのが、ドレイパーである。ドレイパーは、*The Rediscovery of Black Nationalism* の中で、ブラック・ナショナリズムは「白人がつくりあげた幻想である」と断言した（Draper 1970: 13）。皮肉にも、ブラック・ナショナリズムは白人によって考案され、奨励された思想および運動だというのである。ドレイパーは、トーマス・ジェファークソン、フェルディナンド・フェアファックス、エイブラハム・リンカーンらの例を挙げ、彼らがしばしば自由主義的観点から、黒人の「アフリカ帰還運動」（Back-to-Africa movement）を支持したことを示した。もし、「アフリカ帰還運動」がブラック・ナショナリズムのひとつの形態であるなら、それはアメリカ独立当初から白人によって考案されたものだということになる。長い間、黒人はその奨励に対して積極的ではなかったが、1850年にはマーティン・ディレイニやアレクサンダー・クラメルらに代表される黒人が「アフリカ帰還運動」を積極的に「自らの運動」とするようになる。これが、モーゼスがいう「ブラック・ナショナリズムの全盛時代」の始まりである。もちろん、アンテベラム期の白人指導者が完全に自由主義的観点のみから黒人のアフリカ帰還運動を支持したとは言えない。ジェファークソンやリンカーンにしても、白人と黒人が対等だとは考えていなかったし、アフリカへの帰還を奨励したのは自由身分の黒

人だけであった。また南部の白人プランターは主に、自由黒人が奴隷黒人に「悪い影響を与える」と考え、南部の奴隷制度を以前と変わりなく維持するという保守的観点から、「厄介者」としての自由黒人をアフリカへ排除するという意味でアフリカ帰還を奨励した。ドレイパーによれば、北部の白人は「黒人にも自由と平等が与えられるべき」と考えていたが、白人と黒人が同じ社会（アメリカ）のなかで平等になるのは望まなかった。そしてプランテーションを維持したい南部の白人は、黒人が自由になることを望まなかった（ibid：9）。かくして、白人によって、自由黒人のアフリカ帰還運動、すなわちブラック・ナショナリズムが奨励されたのであった。

白人主導のアフリカ帰還運動は、1816年創設のアメリカ植民協会（American Colonization Society）によって企画され、実行にうつされた。当該協会は連邦議会下院の一組織として設置され、合衆国の初代大統領であるワシントンの甥、ジャスティス・ワシントンが会長に就任した。さらに支援者として、当時大きな影響力をもっていたジェームス・マジソン、ジェームス・モンロー、アンドリュー・ジャクソン、ダニエル・ウェブスター、ヘンリー・クレイらが名前を連ねていた（ibid：7）。アメリカ植民協会は、自由な黒人に対し、アフリカに移住すればアメリカでは得ることが難しい自由と平等を手に入れることができると吹聴し、どうにかしてアフリカ移住をその気にさせようとした（ibid：9）。白人たち（特に北部）は一方で、「すべての人間は本来的に自由で、平等につくられている」というアメリカ独立宣言の神髄を原則的に認めた上で、それを黒人にも説いた。他方で、黒人を「すべての人間」から除外し、「自由と平等を得たいのならアフリカへ帰還せよ」と吹聴したのである。ドレイパーの言葉を借りれば、「ブラック・ナショナリストたちよりも、アメリカの建国の父たちの方がブラック・ナショナリズムの発展に貢献した」ということになる（ibid：11）。



アメリカ国内に独立した「黒人だけの国家」を設立しようとするヴァージョンのブラック・ナショナリズムも、「白人がつくりあげた幻想」から始まったとドレイパーは言う。最初にその「幻想」を形にしようとしたのは、アメリカ独立革命前後から奴隷制度廃止論者として知られていたアンソニー・ベネゼットで、1795年、彼はネイティヴ・アメリカンの土地だったアメリカ北西部の一部を購入し、黒人国家をそこに設立することを提案した (ibid : 57)。トーマス・ジェファークソンもまた、ネイティヴ・アメリカンの土地を購入して、「黒人植民地」(a negro colony) を設立する案を真剣に考えていた (ibid : 58)。黒人のみから構成されるそれらの国家または植民地で、黒人たちは自らの運命を自決でき、平等な社会を築くことができるはずであった。ドレイパーによれば、アフリカ帰還運動と同じように、これらの構想も最初は白人によるものであったと主張する。

ドレイパーの議論が意味するのは、「ブラック・ナショナリズムは黒人自らが編み出したのではなく、白人から教えられたイデオロギーおよび運動だった」ということである。したがって、ロビンソンやモーゼスがそう考えるような、単なる「奴隷制度に由来する迫害や差別に対する反動」ではない。また、ブレイシーやピンクニーがそう考えるような、「資本主義制度に由来する経済格差と搾取に対する反動」でもない。たしかに、迫害や差別、経済的格差や搾取がブラック・ナショナリズムを助長する要因であることは間違いなかろう。しかし、それらだけではブラック・ナショナリズムは生じることはなかった。「ナショナリズムというイデオロギー」を教えられて初めて、黒人たちはブラック・ナショナリズムを編み出すことができたということである。筆者は、この考えに賛同する。

ブラック・ナショナリズムが白人から教え込まれたアイデアから生じた言説編成だったということを前提にすれば、それが初めて生じたのは、白人たちが黒人たちに「ナショナリズムのイデオロギー」を教え、黒人たち

がそれを自らのものとした時以降だということになる。可能性としては独立革命以前のことだったということも考えられるが、ドレイパーが示すのは、ボストンの80名の黒人が、1787年、マサチューセッツ州議会に対して、彼らがアフリカで土地を購入してそこに移住するための資金援助を要請したケースである。また同年に自由アフリカ協会（Free African Society）を設立し、アフリカン・メソディスト教会の創設者の一人でもあったリチャード・アレンが、12名の自由黒人と共に「アフリカへの帰還」を目指したというケースも取り上げられている（ibid. : 14-15）<sup>14</sup>。結局このふたつのケースでは「アフリカへの帰還」を達成することはなかったが、ドレイパーにとってそれらはブラック・ナショナリズムの最初のケースである。その後のマーティン・ディレイニやアレクサンダー・クラメルらの19世紀のエミグレーションイズムは、この流れの中で捉えられている。

20世紀のブラック・ナショナリズムは、これらの19世紀までの自由黒人によるエミグレーションイズムから影響を受けると同時に、ドレイパーによれば、マルクス主義のイデオロギーから大きな影響を受けるようになる。特に、デュ・ボイス、マルコムX、ストークリー・カーマイケル、ブラック・パンサー党のヒューイ・ニュートンやボビー・シールらをその例に挙げ、彼らが「ブラック・アメリカ」を「植民地」に見たててその「解放」を説いたことを説明している。ここで注意すべきは、ドレイパー自身がマルクス主義的にブラック・ナショナリズムを捉えているのではなく、「20世紀のブラック・ナショナリストたちがマルクス主義的のイデオロギーを輸入し、それに沿ったかたちでブラック・ネーションを捉えていた」ということである。むしろドレイパーは、マルクス主義を一種の「白人イデオロギー」と捉え、その力によってブラック・ナショナリズムがどのような影響を受けたかを論じているといえよう。この点で、ブレイシーやピンクニーらのマルクス主義的議論とはその根本が異なる。

ドレイパーの *The Rediscovery of Black Nationalism* 全体を通じて言えることは、ヨーロッパ人（白人）の「イデオロギーの力」を一大説明変数として扱っているということである。その意味でドレイパーは、ラドウィックとメイヤー、そしてロビンソンやモーゼスのように、ブラック・ナショナリズムの発生を偶発的（contingent）とも、「黒人独自」の現象とも捉えていない。むしろ、世界的なイデオロギー的・歴史的流れの中でそれを捉えている。「ブラック・ナショナリズムの牽引者」に関しては、白人からのイデオロギー的影響を受け、それらを自らのものとして行動した黒人たちということになろうが、ドレイパーの著作をみると主として上層階級や知識人層の黒人をその対象としている。

## 6. J・テイラー

テイラーは、*Black Nationalism in the United States from Malcolm X to Barack Obama*（2011）の中で、ドレイパーとモーゼスの議論を対比させ、前者を批判する。モーゼスがブラック・ナショナリズムは「北アメリカやヨーロッパのナショナリズムを真似たものではない」と主張したことは先に述べたが、それは主として上記のドレイパーとケドゥーリの議論を否定するためであった（Moses 1996：6）。「ブラック・ナショナリズムは白人の幻想であった」とする主張は、テイラーによれば以下の側面を軽視する結果をもたらす。それは、モーゼス（ロビンソンも）もそう強調したように、アフリカ帰還運動は黒人たちが自らの苦境から脱するために起こした運動だったという側面である。黒人たちは、アフリカの郷里から無理矢理連れてこられた奴隷またはその子孫であり、「生き地獄」の中であえいでいた。アフリカ帰還運動はそれを終わらせるための運動であり、黒人自らの心の中から湧き出てきたものであった。ドレイパーの議論に従えば、啓蒙主義的・博愛主義的な白人の影響なしに、彼らの運動を起し得なかった

ということになる (Taylor 2011 : 116-117)。テイラーからすれば、ブラック・ナショナリズムは「白人から教えられた」のではなく、過酷な生活にあえいでいた黒人たちが、自らの人生を取り戻すべく、自らの力とイマジネーションで起こしたものである。したがって、それは自由黒人たちのブルジョア的運動というよりは、下層の草の根的運動であったはずである。テイラーは、その点を見逃すべきではないと考える<sup>15</sup>。

テイラーは、ドレイパーの議論がヨーロッパ中心主義的解釈に陥っていると批判する。テイラーはB・アンダーソンを引き合いに出し、それを説明する。アンダーソンは、アジアとアフリカのナショナリズムに関して、それが19世紀におけるヨーロッパの諸帝国が示した「モデル」を真似たものとして最初は考えていた。ところが、その後考え直した結果、そのような見かたは「早とちり」であり、より直接的な系譜は植民地の人々自身の「想像」にその由来が求められるべきだということを確信したという。ナショナリズムを「ヨーロッパの発明」だと考えるのは、特にヨーロッパの研究者の間に見られる、根深いヨーロッパ中心主義の現れである (Taylor 2011 : 119 ; Anderson 2006 [1983] : 191)。テイラーがアンダーソンの自省を引き合いに出して言いたいのは、ブラック・ナショナリズムはヨーロッパ人やアングロ・サクソン系アメリカ人らが示したモデルをただ単に「カーボン・コピー」したものではないということである。テイラー自身は、ブラック・ナショナリズムの宗教的側面に光を当て、黒人たちが独自に編み出した黒人宗教やブラック・エレミア (black jeremiad) が果たした役割を強調している (Taylor 2011 : 13)。ただ微妙なのは、テイラー自身がブラック・エレミアの系譜をウィリアム・ブラッドフォードやジョン・ウィンスロップらピルグリム・ファーザーズたちの宗教的エレミアに求めている点で (Taylor 2011 : 136-137)、ブラック・エレミアがブラック・ナショナリズムの一表現であるとすれば、その源はやはりヨー

ロップ人や白人だということになる。単に「教えられた」、あるいは「カーボン・コピー」というのではなく、白人たちのイデオロギーから影響を受け、黒人たちが独自のイマジネーションをもって、ブラック・エレミアを編み出していったとテイラーは考えているのであろう。

### 第3節 ブラック・ナショナリズム論——再考

ここまでブラック・ナショナリズムに関する論争を、代表的な論者の著作を紹介しつつ見てきた。それぞれある一定の説得力をもち、現在でもそれぞれ支持者がいる。筆者の立場は、ブラック・ナショナリズム研究における系譜から言って、ヨーロッパ人の「イデオロギーの力」を強調するドレイパーのそれに近い。したがって筆者は、資本主義に由来する経済格差や経済的搾取への反動だと考えるブレイシー、ピンクニー、ブッシュらの見解、奴隷制度に由来するセグリゲーション、差別、抑圧への反動だと考えるモーゼス、ロビンソン、テイラーらの見解に異議を唱える立場をとる。伝統的なナショナリズム研究において「イデオロギーの力」を重視したのは、モーゼスによる批判の対象にもなったケドゥーリの他に、H・コーン、L・グリーンフェルトらがいる。本論文は、伝統的なナショナリズム研究の系譜でいえば彼らの「イデオロギー的アプローチ」の中に位置づけられる。

ケドゥーリは、*Nationalism in Asia and Africa* (1970) において、アジア・アフリカにおけるナショナリズムの由来を「ヨーロッパのイデオロギー」に求めた。ところが、ケドゥーリが当該著書を出版した1970年前後は、ブレイシーやピンクニーのブラック・ナショナリズム研究でもみたように、マルクス主義的分析が影響力をもっていた。アジア・アフリカのナショナリズムは、ヨーロッパ人による資本主義的な経済支配に対する反動である

とするマルクス主義的な見解である。ケドゥーリによれば、マルクス主義を「福音」として信奉していなかったとしても、他の多くの論者も結局のところ「アジア・アフリカのナショナリズムはヨーロッパ人による支配と搾取が生み出す当然の結果」と考える傾向があったという。すなわち、マルクス主義者でない論者も含めて、多くの論者がアジア・アフリカのナショナリズムを「ヨーロッパ人による社会的・政治的・経済的搾取・差別への反動」だと考えていたということである。マルクス主義者ではない、モーゼス、ロビンソン、テイラーらのブラック・ナショナリズム研究者もこの範疇に入ろう。

ケドゥーリによれば、このように考えられた傾向は、ヨーロッパの知識人による罪悪感から生まれ、世界中に広まっていったものである。ケドゥーリは、LSE の著名な歴史学者トゥインビーを例に挙げ、ヨーロッパの知識人がどのような罪悪感を抱いていたかを述べた。

1952年のリース (Reith) 講演でトゥインビー教授は断言した。もし西洋人が非西洋人に西洋をどのように見ているかを聞いたとすれば、その西洋人はいつも同じ答えを聞くことになるであろう。

[中略]。非西洋人は言うであろう。西洋は、近代における支配的侵略者であったと。そして彼らは皆、彼らに対して行われた西洋による侵略の経験を語るであろう。[中略]。アジア人は、西洋人がアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、南アジア、東アジアの開発されていない土地のほとんどを占領してしまったと言うであろう。アフリカ人は、アメリカの西洋人植民者に仕えるために奴隷にされ大西洋を越えて無理矢理連れてこられたあげく、西洋人の富への欲望を満たすための生きた道具にされたと言うであろう。(ibid.: 2)

さらにケドゥーリは、フランスのノーベル文学賞受賞者で哲学者でもあるジャン・ポール・サルトルの言葉を引く。

皆よく知っている通り、我々は搾取する側の人々である。我々は「新大陸」で黄金、鉄、石油を掘り出し、ヨーロッパの都心に運び続けてきたということをよく知っている。〔中略〕。そのような植民地的搾取からの利益を共有している我々は、皆共犯者である。  
(ibid. : 3)

ケドゥーリによれば、トゥインビーやサルトルのこのような自己批判的な西洋人の見解、そこに内在する罪悪感、憤り、倫理観は、実は最近になって現れたものである。ローマ帝国の時代はもとより、少なくとも20世紀に入るまで、非西洋に対するこのような罪悪感は一般的ではなかったという (ibid. : 3)。むしろ、西洋人の文明やキリスト教によって、野蛮な非西洋人の文明化に貢献できるとさえ考えていた西洋人は少なくなかった。そして多くのアジア・アフリカの人々（特にエリート）が西洋の文明、言語、宗教を受け入れたのは、彼ら自身もそのように考えていたという側面があった。ところがケドゥーリによれば、20世紀に入って西洋人自らがアジア・アフリカの植民地支配に対して罪悪感を抱きはじめ、第二次世界大戦後には世界中で一般化されるに至ったという。

ケドゥーリによれば、そのような罪悪感の認識は、実はヨーロッパの知識人によって発明され、広められたものである (ibid. : 2)。ケドゥーリはその発明者の一人として、イギリスの経済学者ジョン・アトキンソン・ホブソン (1858-1940) の名を挙げる。ホブソンは、1902年に出版した *Imperialism* の中で、資本主義社会における投資家を「欲深い搾取者」と

して描き出し、彼らがいかに彼らの国家を無慈悲な帝国主義・植民地主義に向かわせたかを陳述した。このホブソンの著作から大きな影響を受けて著されたのが、レーニンのかの有名な *Imperialism, the Highest State of Capitalism* (1916) である。レーニンはその中で、第一次世界大戦は金融資本と手を組んだ資本主義国家が世界を分割し、植民地を奪い合い、金融資本の勢力範囲を拡大するために戦った略奪的な帝国主義の戦争であったと糾弾した (ibid : 7)。このレーニンによる批判は「搾取される側」の第三世界で熱烈な支持を受ける一方、他方で超大国ソビエト連邦の国家イデオロギーの一部となり、世界の一大イデオロギーへと成長していく。ケドゥーリによれば、現代に生きる我々は少なからずこのイデオロギーから影響を受けていて、「資本主義・帝国主義国家は支配地域を植民地化し、そこに住む人々を苦しめる」と考えがちである (ibid : 8)。西洋人の側からすれば、このような認識が存在すること自体、何らかの罪悪感を抱かずにはいられない。そして次のような結論にいたる。すなわち、アジア・アフリカのナショナリズムは、西洋の帝国主義・植民地主義がもたらす絶え難き搾取、差別、抑圧への、当然の結果としての反動であると。

既に見たように、マルクス主義的アプローチをとるブレイシーやピンクニーだけでなく、マルクス主義的アプローチを批判する側に立ったモーゼスやロビンソン、ドレイパーの見解を退けてモーゼスを支持したテイラーに関しても、「ヨーロッパ人（白人）による搾取、差別、抑圧への反動」としてブラック・ナショナリズムを捉えている。彼らがこのように考えたのも、「外国支配→現地人に対する搾取・差別・抑圧→現地人による反動（ナショナリズム）」という構図があまりにも「自明」「常識」になってしまった結果であろう。しかし一見説得力があるかと思われるこの「外国人支配反動説」は、よく考えると一般化できそうにない。世界で勃興した古代や中世の帝国は、反動的ナショナリズムを先々の支配地で引き起こした



だろうか。そうではないように思われる。激しいナショナリズムが各地で引き起こされていれば、広大で、強大な帝国を築くことはできなかったに違いない。そうではないからこそローマ帝国は、ヨーロッパ全域から北アフリカ、東はアナトリアまでを領土とし、それらの地を幾世紀にもわたって安定的に支配し続けたのである。歴代の中華帝国やインド帝国にしても、それぞれの支配地で反動的ナショナリズムを引き起こしたであろうか。もちろん、支配地域を拡大していく過程で現地人による反撃や反乱はあっただろうが、むしろ、一旦帝国に組み込まれてしまえば、帝国で使用された言語や習慣などを現地人がさほど抵抗なく受け入れ、エリートになればなるほどそれらを積極的に学ぼうとしたと考えられる。広大で多様な中国で、そもそもそのような意識がほとんど存在しなかったにもかかわらず、自らを「漢族」と見なす人々が現在90%以上を超えるような状況になったのは、そのような適応傾向があったからではなかろうか。反動的ナショナリズムが普遍的現象として起きるのであれば、安定的な帝国は歴史上存在し得なかったに違いない。「外国支配→現地人に対する搾取・差別・抑圧→現地人による反動（ナショナリズム）」という構図は、歴史的に見て明らかに一般化できない。

アジア、アフリカ、南北アメリカは確かに、ヨーロッパ人に支配された。それは世界史的に見れば、無数にある外国支配の一例であって、特に例外的ではない。世界史上例外的だったのは、ヨーロッパの支配者が近代的なイデオロギーをアジア・アフリカ・南北アメリカに持ち込んだことであった。ケドゥーリーいわく、アジア・アフリカの人々がヨーロッパ人に対してナショナリズムを発動したのは、支配者が外国人だったからではない。支配者が他でもないヨーロッパ人だったからである（ibid：22）。アジア・アフリカの人々は、単に外国人に支配されていたという理由ではなく、近代ヨーロッパ人に支配されていたからこそ、否応なしにヨーロッパ人が持

ち込んだ近代イデオロギーに接することになったのである。そしてその近代イデオロギーを学び、自らのヴァージョンのナショナリズムを興すに至ったのである。ドレイパーが、ブラック・ナショナリズムは黒人自らが編み出したのではなく、白人から学んだ思想および運動だと考えたのは、的を射ている。ここで主張しようとしているのは、ナショナリズムの言説が編成される背景には、近代ヨーロッパのイデオロギーがその背景にあったということである。換言すれば、近代ヨーロッパのイデオロギーが不在ならば、ナショナリズムの言説は編成され得なかったということである。または、結果として現れるナショナリズムの言説編成は、近代ヨーロッパのイデオロギーに由来する、とも言える。

ブラック・ナショナリズムは、その核になるイデオロギーがヨーロッパ（白人）から輸入されたという点で、アジア・アフリカのナショナリズムと同じである。「ブラック」の部分は黒人が独自に編み出したものであるにしても、「ナショナリズム」を生み出すイデオロギーは白人から学んだものである。「ブラック・ナショナリストたちよりも、アメリカの建国の父たちの方がブラック・ナショナリズムの発展に貢献した」とドレイパーが言ったのは（Draper 1970 : 11）、あながち間違いではない。ナショナリズムは、ヨーロッパで発祥し世界中に広まったイデオロギーが基になって生じた言説編成であり、ブラック・ナショナリズムはそのひとつのヴァージョンである。その意味で、ブラック・ナショナリズムは独自な現象ではない。また、マルクス主義アプローチをとるブレイシー、ピンクニー、ブッシュが主張するように、資本主義に由来する階級的搾取に対する単なる反動でもないし、モーゼス、ロビンソン、テイラーらがいうように、奴隷制度に由来する差別やセグレーションに対する単なる反動でもない。ブラック・ナショナリズム（言説編成としての）の主たる説明変数は、近代ヨーロッパのイデオロギーと、それがもたらした様々な影響である。

## おわりに

本論文では、1960年代後半からアメリカで「ブーム」になった「ブラック・ナショナリズム研究」を取り上げ、主要な論者の議論を概観した。その上で、主流であった「反動論」、すなわち、ブラック・ナショナリズムを「奴隷制度に由来する迫害や差別に対する反動」または「資本主義制度に由来する経済格差と搾取に対する反動」と考えるアプローチを否定し、いわゆる「イデオロギー的アプローチ」を支持した。もちろん、本論文中でその「イデオロギー的アプローチ」の有効性が説得力のあるかたちで十分に証明されたというつもりはない。それをするには、個々のケースを調べ上げ、歴史的根拠をもって主張されなければならない。本論文でそれを試みるのは、紙面上の制約もあり、見送らせていただいた。

したがって今後の課題は、個々のケースにあたることである。その場合、研究の対象となるのは、「ブラック・ナショナリスト」と目されている人物である。そしてそれらの人物の自伝、伝記、著作、手紙、スピーチなどを資料にして、彼らがいかに「西欧イデオロギー」から影響を受け、ブラック・ナショナリズムを自分のものとするように至ったかを検証していく必要がある。それをしてはじめて、本論文で支持した「イデオロギー的アプローチ」の有効性を主張することができるといえる。「ブラック・ナショナリスト」として即座に頭に浮かぶのは、デヴィッド・ウォーカー、マーティン・ディレイニ、アレクサンダー・クラメル、マーカス・ガーヴェイ、マルコムXらの人物である。今後の研究で、これらの人物をケースに取り上げ、西欧イデオロギーがいかに影響力を発揮したかを証明していきたいと思う。

参考文献

- Anderson, B. (1991 [1983]) *Imagined Community*, rev. edn, London: Verso. (白石隆・白石さや訳『増補 想像の共同体』N T T 出版、1997年)
- Bhabha, H. (ed.) (1990) *Nation and Narration*, London: Routledge.
- Billig, M. (1995) *Banal nationalism*, London: Sage.
- Bracey, John H., Meier, August., Rudwick, Elliott. (eds.) (1970) *Black Nationalism in America*, New York: The Bobbs-Merrill Company, Inc.
- Breuilly, J. (1993 [1982]) *Nationalism and the State*, 2nd edn, Manchester: Manchester University Press.
- Brubaker, R. (1996) *Nationalism Reframed*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bush, Rod. (2000) *We Are Not What We Seem: Black Nationalism and Class Struggle in the American Century*, New York: New York University Press.
- Calhoun, C. (1997) *Nationalism*, Buckingham: Open University Press.
- Carlisle, Rodney. (1975) *The Roots of Black Nationalism*, New York: National University Publications.
- Draper, Theodore. (1969) *The Rediscovery of Black Nationalism*, New York: Viking Press.
- Franklin, John H. (1974) *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans*, New York: Alfred A. Knopf, Inc. (井出義光他訳『アメリカ黒人の歴史——奴隷から自由へ』研究社出版、1978年).
- Franklin, John H. (1989) *Race and History: Selected Essays 1938-1988*, Baton Rouge: Louisiana University Press (本田創造監訳『人種と歴史』岩波書店、1993年).
- Geertz, C. (1993 [1973]) *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*, 2nd edn, London: Fontana. (吉田禎吾ほか訳『文化の解釈学』岩波書店、1987年).
- Greenfeld, L. (1992) *Nationalism: Five Roads to Modernity*, Massachusetts: Harvard University Press.
- Hall, S. (1992) 'The Question of Cultural Identity', in S. Hall, D. Held, and T. McGrew (eds.), *Modernity and Its Futures*, Cambridge: Polity Press, 595-634.
- Hechter, M (2000) *Containing Nationalism*, Oxford: Oxford University Press.
- Hobsbawm, E. and Ranger, T. (eds) (1983) *The Invention of Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press. (前川啓治ほか訳『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年)
- Kedourie, E. (1970) *Nationalism in Asia and Africa*, London: Weidenfeld & Nicolson.
- Kedourie, E. (1994 [1960]) *Nationalism*, 4th edn, Oxford: Blackwell. (小林正之ほか訳『ナショナリズム』学文社、1993年)

- Kohn, H. (2005 [1944]) *The Idea of Nationalism: A Study in Its Origins and Background*, New York: The Macmillan Company.
- Morgan, Edmund S. (1988) *Inventing the People: The Rise of Popular Sovereignty in England and America*, New York: W. W. Norton Company.
- Moses, Wilson J. (1978) *The Golden Age of Black Nationalism, 1850-1925*, New York: Oxford University Press.
- Moses, Wilson J. (ed.) (1996) *Classical Black Nationalism: From the American Revolution to Marcus Garvey*, New York: New York University Press.
- Nairn, T. (2003 [1977]) *The Break-up of Britain*, 3rd edn, Australia: Common Ground Publishing.
- Ozirimli, U. (2000) *Theories of Nationalism*, New York: Palgrave.
- Pinkney, Alphonso. (1976) *Red, Black, and Green: Black Nationalism in the United States*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Redkey, Edwin S. (1969) *Black Exodus: Black Nationalist and Back to Africa Movements, 1890-1910*, New Haven: Yale University Press.
- Robinson, Dean E. (2001) *Black Nationalism in American Politics and Thought*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Stuckey, Sterling. (1972) *The Ideological Origins of Black Nationalism*, Boston: Beacon Press.
- Taylor, James L. (2011) *Black Nationalism in the United States From Malcolm X to Barack Obama*, London: Lynne Rienner Publishers.
- Udom, Essin E. U. (1962) *Black Nationalism: A Search for an Identity in America*, Chicago: The University of Chicago Press.

## 注

- 1 ネーションを一種の概念的共同体カテゴリーであると考えている論者に、R・ブルベイカー、S・ホール、C・カルホーンらがいる (Brubaker 1996: 16; Hall 1992: 617; Calhoun 1993: 211; 1997: 42)。
- 2 アメリカの黒人は、歴史上、ニグロ、アングロ・アフリカン、ブラック・アメリカン、アフリカン・アメリカンなどと呼ばれてきた。本論文では、混乱を避けるため、できるかぎり統一して「黒人」と呼ぶことにする。
- 3 ブルイリーによれば、これらの主張をもとに、国家権力を獲得し、行使することを正当化する政治運動が、ナショナリズムである (Breuilly 1993 [1982]: 2)。
- 4 このような、独自性、有価性、主権性を有する共同体としてイメージされるネーション像は、西洋におけるイデオロギーの歴史的発展に由来する。こうした主張

は、社会構成主義的な解釈を基に、コーン、グリーンフェルド、ケドゥーリらの議論を踏襲している (Kohn 1944; Greenfeld 1992; Kedourie 1960)。

- 5 ナショナリズムを一種の言説として扱う論者に、B・アンダーソン、H・バーバ、S・ホール、M・ピリッグ、C・カルホーン、U・オズキリムリらがいる (Anderson 1983; Bhabha 1990; Hall 1992; Billig 1995; Calhoun 1997; Ozkirimli 2000)。いずれの論者も、さまざまな言説 (ナショナリズム) によってナショナル・アイデンティティ、またはナショナリティがどのように構築されるかを論じている。
- 6 ナショナリズム研究の分野においてマルクス主義的立場をとった論者で有名なのは、M・ヘクター (1975) と T・ネアン (1977) であろう。前者は「国内植民地」、後者は「不均等な発展」(uneven development) という概念を使って、両者ともイギリスにおけるナショナル・マイノリティのナショナリズム発生のメカニズムを説明した。彼らに先立って、アメリカのブラック・ナショナリズムをマルクス主義的に説明した論者は数多くいた。早くから黒人に関する「国内植民地論」を唱えていた研究者は H・クルーズであった。クルーズによれば、「アメリカのニグロは、最初から、植民地の被支配者として存在した。黒人の奴隷化は、ヨーロッパ列強の植民地拡大と時期が一致し、その状況は国内植民地としか言いようがない。アメリカは、アフリカに植民地を建設する代わりに、植民地システムを国内に持ち込み、南部の州に設置した」(Cruse 1968: 76)。他のマルクス主義的論者を挙げるとすれば、以下のとおりである。Allen, Robert. (1969) *Black Awakening in Capitalist America: An Analytic History*, NY: Doubleday; Boggs, James. (1970) *Racism and the Class Struggle*, NY: Monthly Review Press; Mkalimoto, Ernie. (1970) *Revolutionary Nationalism and the Class Struggle*, Detroit: Black Star Publishers; Blauner, Robert (1969) "Internal Colonialism and Ghetto Revolt", *Social Problems*, 16: 193-408. SNCC のリーダー、ストークリー・カーマイケルとチャールズ・ハミルトンも *Black Power: The Politics of Liberation in America*, NY: Vintage Books (1967) の中でマルクス主義的解釈をしていた。
- 7 例えば、Bush, Rod. (2000) *We Are Not What We Seem: Black Nationalism and Class Struggle in the American Century*, NY: New York University Press.
- 8 フレイザーは、*The Negro Church* (1964) の中で奴隷黒人たちが教会という組織を通じてどのように共同体を形成し、「黒人教会」(negro church) の伝統をつくり上げていったかを明らかにした (Frazier 1964)。
- 9 もちろんここでいう「最近」というのは、彼らの著書が出版された1970年前後のことである。ただ、ロビンソンもそう言うように、今も昔もブラック・ナショ

- ナリストが地域、階級、性別、年齢等の違いを超えて、黒人の間で広く支持されたことは一度もなかったとする見方は正しいと思われる (Robinson 2001: 134)。
- 10 筆者は、その時どきのコンテクストの影響を重視するという意味で、メイヤーとラドウィックのここでの見解に同意する。ただし、筆者は全てのナショナリズムの根底において、「近代的イデオロギー」が大きく作用していると考える。
  - 11 ピンクニーは、黒人に関して国内植民地論的アプローチをとる先駆的研究としてクルーズの *Rebellion or Revolution?* (1968) と R・アレンの *Black Awakening in Capitalist America* (1969) を挙げている。興味深いことに、アメリカにおける黒人と白人を本質的に被植民者と植民者の関係として捉え、最も早くから国内植民地論を唱えていた論者として「ブラック・ナショナリズムの父」として知られているマーティン・ディレイニの名を挙げている。ピンクニーはその根拠として、ディレイニがアメリカの黒人をロシアのポーランド人、オーストリアのハンガリー人、イギリスにおけるアイルランド人、ウェールズ人、スコットランド人と比較し、アメリカの黒人は「ネーションの中のネーションである」(ピンクニーはいずれも国内植民地として捉えている) と述べていることを挙げている (Pinkney 1976: 8-9)。
  - 12 後で詳しく述べるが、筆者はブラック・ナショナリズムの源として、モーゼスが一蹴するこの「ヨーロッパ発祥の近代イデオロギーの影響」を重視する。
  - 13 筆者は、ブラック・ナショナリズムが「アドホックなもの」「19世紀と20世紀に断絶があるもの」だとは考えない。根底には西欧イデオロギーの伝統があり、その延長線上にあるものだと考える。
  - 14 ドレイパーによれば、1787年にフィラデルフィアで設立された自由アフリカ協会は、アメリカの黒人によって、アメリカの黒人のために設立された最初の組織であった (Draper 1970: 14)。アフリカン・メソディスト教会は、白人の教会で差別を受けて不満を抱えていた自由黒人たちが、黒人だけの教会をつくろうとする動きの中で、アングロ・アメリカン・メソディスト教会のフランシス・アスバリー監督 (白人の bishop) の指導によって、リチャード・アレンが1794年に設立したものである。リチャード・アレンは、1816年に黒人として初めて、アフリカン・メソディスト教会の監督となり、白人のメソディスト教会から完全に独立したかたちで発展することとなった (Jaynes 2005: 28-29)。
  - 15 既にみたように、モーゼスは19世紀のブラック・ナショナリズムを「エリート運動」として捉えている。この点は、テイラーの見方と異なる。